

1. 平成29年度調査および結果の特徴

平成29年度調査問題は、学習指導要領に基づき、児童生徒が十分に身に付け、活用できるようにしておくべきと考えられるものを各領域からバランスよく出題された。その際、「4年間のまとめ」（国立教育政策研究所において、平成19～22年度の4回の調査結果を分析して、「成果」と「課題」を整理した報告書）で指摘した課題や平成24年度～28年度調査で見られた課題についての改善状況を把握する観点からの問題も出題された。今回の調査結果から、これまでの調査で見られた課題について依然として課題の見られるものがある。一方、今回の調査を見る限り、改善状況が見られたものもあるが、これらについても引き続き注視が必要である。

小学校及び中学校の調査結果は次のとおりである。

		依然として課題が見られるもの	改善状況が見られたが、引き続き注視が必要なもの
小学校	国語	<ul style="list-style-type: none"> 目的や意図に応じて、話の構成や内容を工夫し、場に応じた適切な言葉遣いで話すこと。 目的や意図に応じ、必要な内容を整理して、協力を依頼する文章を書くこと。 物語を読み、感想を伝え合う中で、具体的な叙述を基に理由を明確にして、自分の考えをまとめること。 	<ul style="list-style-type: none"> ことわざの意味の理解や漢字の読み。
	算数	<ul style="list-style-type: none"> 資料から、二次元表の合計欄に入る数を求めたり、示された式の中の数の意味を、二次元表と関連付けながら正しく解釈し、それを記述したりすること。 問題に示された二つの数量の関係を一般化して捉え、そのきまりを記述したりすること。 示された方法や考えを解釈し、問題場面に適用したり、ほかの場合に適用して解決方法を考え、それを記述したりすること。 身近なものに置き換えた基準量と割合を基に、比較量を判断し、その判断理由を記述すること。 	<ul style="list-style-type: none"> 二つの数量の関係や、小数の乗法の計算における乗法の性質の理解。

		依然として課題が見られるもの	改善状況が見られたが、引き続き注視が必要なもの
中 学 校	国 語	<ul style="list-style-type: none"> ・事象や行為などを表す多様な語句について理解すること。 ・伝えたい事実や事柄について、根拠として取り上げる内容が適切かどうか吟味すること。 ・見通しをもって必要な情報を集める際に、集める方法や内容を構想することはできているが、その情報が必要であると考える理由を明確にすること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字の読みや、目的に応じて資料を効果的に活用して話すこと。
	数 学	<ul style="list-style-type: none"> ・扇形の弧の長さを求めること、関数の意味の理解、範囲の意味の理解。 ・事柄の特徴を数学的な表現を用いて説明すること。 ・資料の傾向を適切に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明すること。 ・事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ある数量を正の数と負の数で表すこと の理解、簡単な一元一次方程式を解くこと。 ・多角形の内角の和の求め方の理解、二元一次方程式と一次関数のグラフの関係の理解、相対度数を求めること。

上記の分析結果は、全国の各設問の平均正答率や正答数分布の状況等から明らかになったことであり、この平均正答率や正答数分布は、熊取町と全国、大阪府との間で若干の差はあるものの、概ね同じ傾向にある。(次頁の正答数分布図参照)

したがって、これらの結果の特徴や課題は、熊取町を含め小学6年生及び中学3年生全体の課題であると言える。

また、熊取町の平均正答率を全国の結果と比較すると、小学校では算数Aを除いて全国平均を下回り、中学校では国語A・Bにおいては全国平均を下回り、数学A・Bにおいては全国平均を上回った。

大阪府との比較では、小学校・中学校とも、すべてにおいて上回る結果となった。

2. 学力調査から明らかになった課題と今後の取り組み

(1) 国語の課題

今回実施された「平成 29 年度全国学力・学習状況調査」における国語の状況については、小学校・中学校とも、国語 A、B とも全国平均を下回るも、大阪府平均を上回る結果となった。

学力調査の結果から、小学校では、知識の面において、ローマ字の音節の表し方を理解し、平仮名で表記されたものをローマ字で書いたり、表記されたものを正しく読んだりする（言語についての知識・理解・技能）ことに課題が見られた。また、活用の面においては、グラフを基に分かったことを的確に書く（書く）、話し手の意図を捉えながら聞き、話の展開に沿って質問する（書く）（話す・聞く）など書く能力、話す・聞く能力に課題があることが明らかとなった。

学力調査の結果から、小学校では知識の面において、全国・府と同傾向に手紙の構成を理解し、後付けを書く「書くこと」ことに課題が見られた。また、最終設問の「配当別漢字配当表に示されている漢字を正しく書く・読む（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）」の正答率は概ね全国・大阪府と変わらない結果であったにも関わらず、無解答率が高かった。「解答時間が十分であった。」と回答した割合も低く、調査問題全体を読み込む力、本調査のように普段の問われ方と違う課題でも、向き合い最後まで諦めずやり抜こうとする姿勢の 2 極化が表れている。活用の面においては、本年度も目的や意図に応じ必要な内容を整理して書く「書くこと」や、自分の考えを広げたり深めたりする発言の意図を捉える「読むこと」に、引き続き課題があることが明らかとなった。

しかし、昨年度調査の課題であった「読むこと」では改善が見られ、全国比では差が縮まり、大阪府平均よりも高い結果となった。また、A、B 両問題とも増加していた無解答率は、本年度については B 問題で全国・大阪府と比べ低い割合であった。

B 問題活用の課題とされた「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり書いたりしていますか」「国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いていますか」の設問の肯定的回答の割合は、今年度は大幅に上昇し、正答率の上昇につながったと言える。教員が本調査から見えた子どもたちの課題に正対し取り組みを進めたことや普段の授業改善の意識が反映されたものと考えられる。

また、中学校においては、知識の面において、事象や行為などを表す多様な語句について理解する（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）こと、相手にわかりやすいように語句を選択して話す（話す）ことに課題が見られた。活用の面では、表現の仕方を捉え、自分の考えを書く（書く）、相手の反応を踏まえながら、事実や事柄が相手に分かりやすく伝わるように話す（話す）ことに課題があることが明らかとなった。根拠を明確にして書くことについては、昨年度に引き続き、課題であった。

生徒質問紙調査では、「国語の勉強は好きですか」「国語の勉強は大切だと思いますか」「国

語の授業の内容はよくわかりますか」に対する肯定的回答は、全国・大阪府平均ともに下回る結果となった。特に授業の内容がわかると回答した生徒の割合は、昨年度と比較すると大幅に下がっており、言語活動を通して「知識及び技能」を活用する授業等を展開することにより、生徒の学習に対する意識を高めていく必要がある。

(2) 国語力向上に向けての方策

今回の出題内容において、小学校では国語 A、B の領域・観点・問題形式別の平均正答率の状況から、ほとんどの項目で大阪府平均を上回り、全国平均を下回る結果となった。中学校においても、ほとんどの項目で大阪府平均を上回り、全国平均を下回る結果となった。

具体的には、小学校では「書くこと(とくに記述式)」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(漢字を正しく読むこと)」「読むこと」、中学校では、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(漢字を正しく書くこと)」「話すこと」「書くこと(根拠を明確にして書くこと)」について課題があることが明らかとなった。

これらのことから、国語の授業を改善するための方策を示す。

[1]話す力・聞く力の育成

- ・話の構成や内容を工夫するために、自分の立場を明確に説明したり、事実と感想、意見とを区別したり、結論付けを明確にしたりすることなどについて指導する。
- ・場に応じた適切な言葉遣いで話すために、声量や速度、抑揚や間の取り方、改まった言葉や丁寧な言葉、敬体と常体との使い分けなど、その場に応じた最も適切な表現の仕方について指導する。
- ・グループや学級全体の問題解決などに向けて、司会者や提案者、参加者などの役割を決めて話し合い、より一層豊かな相互交流を図ることができるような活動を行う。
- ・個人やグループの意見の共通点や相違点を整理し、児童一人一人の考えを反映させながら、学級全体として一つの考えに集約することや、互いに意見を述べ合う中で、各自の考えを広げたり深めたりできるよう指導する。また、お互いの考えが相違する場合には、それぞれの考えがどのようなことに基づいているのかということに着目して話し合いを進めることができるよう指導する。
- ・様々な話し合いの場面において、児童一人一人がそれぞれの役割について学ぶことができるように、意図的、計画的に機会を設定する。
- ・スピーチをする際には、自分の伝えたいことが聞き手に対して十分に伝わる内容や表現になっているかを考えて話を構成し、場の状況や聞き手の様子に応じて話すように指導する。
- ・事前に想定した話し方や内容だけでなく、うなずきや表情などという相手の反応から、話の受け止め方や理解の状況を捉えて話すように指導する。
- ・実際にスピーチをする様子を録画・録音し、伝えたい内容が正確に伝わっているか、

聞き手に分かりやすい言葉になっているかなどについて振り返り、話し手と聞き手の両方の立場から検討するなどの活動を行う。

[2]書く力の育成

- ・総合的な学習の時間や社会科において、地域での体験学習の指導を依頼する手紙や、運動会などの学校行事に案内をする手紙、社会科見学等でお世話になったことへのお礼の手紙などを書く活動を国語科のみならず、国語科との関連を図りながら各教科等に意図的、計画的に設定する。
- ・目的や意図を明確にして、書く事柄を選び、書きたいことの中心が伝わるように詳しく書いたり簡単に書いたりすることができるように指導する。
- ・手紙を書く際に、「前文」、「本文」、「末文」、「後付け」といった手紙全体の構成や、後付けにおける署名と宛て名の位置関係といった手紙の基本的な形式などについて指導するとともに、手紙の形式がもつその意味についても指導する。
- ・自分の考えを明確に伝えるために、簡単に書くことが必要な場合と、詳しく書くことが必要な場合とがあることを理解させ、目的や意図に応じて、どちらが読み手に分かりやすく伝えることができるかを判断することができるように指導する。
- ・自ら課題を決めて文章を書く際には、目的や意図を明確にし、必要な情報を集めながら自分の考えをまとめるように指導する。その際、どのように情報を集めて、どのように提示すれば効果的なのかについてグループで検討し、よりよい情報収集の方法について考えたり、具体的な提示の仕方について互いに助言し合ったりする。
- ・文学的な文章を読んで、印象に残った場面や描写がどのような内容であるかを明確にしたり、感じたことや考えたことを具体的に説明したりすることができるように指導する。
- ・新聞やインターネットの書評などを取り上げ、そこに書かれたものの見方や考え方と自分のものの見方や考え方と対比させて新しい考え方を知ったり、自分の考えを再構築したりする活動を行う。

[3]読む力の育成

- ・物語を読んで感想を伝え合い、一人一人の感じ方に違いがあることに気づき、自分の考えを広げたり深めたりすることができるように、各自考えたことが、どのように共通していたり相違したりしているのかなどを明らかにしながら交流する機会を設定する。
- ・相手の考えがどの叙述に基づいているのかや、自分の理解が正しいかどうかを確かめるために、質問したりするなど互いに補完し合うことによって、自分の考えを広げたり深めたりすることができるように指導する。
- ・各場面の登場人物の言動が文章全体に表れたものの見方などにどのように関わって

いるかを考え、それらの考えを交流して文章の理解を深めるなどの活動を行う。

- ・着目した語句や文が含まれる部分を読んで考えるだけでなく、文章の中の時間的、空間的な場面の展開などに注意して文章全体を読み、目的に応じて一つ一つの語句や文の意味を捉えることができるように指導する。

[4] 言語についての知識・理解・技能の定着

- ・季節感や風情、俳句に込めた思いなどを思い浮かべること、七音五音を中心としたリズムから、国語の美しい響きを感じ取りながら音読したり暗唱したりすることを通して、文語の調子に親しむことができる機会を設ける。
- ・俳句を繰り返し音読しながら、言葉の美しい響きや俳句のもつリズムに着目して、俳句に表れている情景や作者の思いなどについて感じたことを交流する活動を行う。
- ・国語辞典やことわざ辞典などを日常的に活用できるよう、辞典利用について学習する第3学年の段階から意図的、計画的に指導する必要がある。
- ・学習した漢字を字形に注意しながら繰り返し書いて練習することのみならず、漢字のもつ意味を考えながら、文や文章の中で正しく使うことができるように指導する。
- ・漢字を正しく読み書きできるよう、配当学年での新出時の学習で終わらず、既習の漢字として繰り返し学習を行い定着を図る。
- ・「話すこと・聞くこと」の学習や、他教科等の学習の中でも同音の漢字や形が似ている漢字などの間違いやすい漢字について意識させるようにする。
- ・生活の中の具体的な場面を取り上げ、その場の状況に応じた適切な言葉について考えたり、調べたりするなどの活動を行う。

その他

①指導上の工夫

- ・児童生徒が「〇〇したい」と感じるような魅力ある課題設定や授業のねらいを示し、目的意識をもって主体的に学習に取り組めるようにする。
- ・全ての教科や学校教育活動において、意識的に自分の考えを表現する機会を設ける。ペア学習やグループ学習など協同的な学び合いを通して、児童生徒が相互に意見や考えを交流する場面を日常的にもち、深い学びにつなげる。

②評価の工夫

- ・「指導と評価の一体化」の観点からも学習や言語活動の評価規準・評価基準を具体的に設定し、児童生徒が表現した内容が適切であるかどうか判断し、必要に応じて指導を加える。

(3) 算数・数学の課題

今回実施された「平成29年度全国学力・学習状況調査」における算数の状況について、

小学校では、算数 A は全国・大阪府平均を上回り、算数 B は大阪府平均を上回ったが全国平均を下回る結果となった。

中学校では、数学 A・B ともに全国・大阪府平均を上回る結果となった。

学力調査の結果から、小学校では、「数と計算」領域においておおむね理解できているものの、整数と小数の混合した計算、最小公倍数を求めることに課題が見られた。また、「図形」領域では、図形を用いて「数量関係」の基準量・割合・比較量を捉えることに課題がみられた。

記述式の設定では、無解答率が全国・大阪府より低かった。質問紙調査において、「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と回答している割合が高いことから、努力した様子が見られる。しかし、正答率が低い設問があることから、説明の内容が不十分であったと考えられる。

中学校では、「関数」領域の設問のいくつかに課題が見られた。また、中学校でも記述式の設定では、無解答率は全国・大阪府より低く、解答しようとした様子が見られるが、正答率が低い設問があることから、説明の内容が不十分であったと考えられる。

これらのことから、全国・大阪府と同様に、小学校・中学校のどちらも、児童・生徒の思考力・判断力・表現力等に課題があることがわかる。それらの力を計画的、継続的に育んでいくとともに、算数・数学においては学習内容の系統性が高いことから、小学校・中学校の系統性を意識した授業改善を続けていく必要がある。

児童生徒質問紙調査では、「算数・数学の授業の内容がよく分かりますか」「算数・数学の問題の解き方が分からないときは、諦めずにいろいろな方法を考えますか」という質問に、肯定的な回答をしている児童生徒の割合は、全国・大阪府よりも高かった。意欲的に算数・数学の学習に取り組むことによって、学習内容の理解が深まっていると考えられる。これらの学習の積み重ねが、「算数・数学の勉強は好きですか」という質問に肯定的な回答をしている児童生徒の割合が、全国・大阪府よりも高い結果となって表れていると考えられる。また、「今回の算数・数学の問題について、言葉や数、式を使って、わけや求め方などを書く問題がありましたが、どのように解答しましたか」という質問に、「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と回答した児童生徒も、全国・大阪府よりも多かった。この姿勢は無解答率の低さに表れ、児童生徒が最後まで粘り強く考えていたと評価できる。

(4) 算数・数学の学力向上に向けての方策

小学校・中学校に共通して、児童生徒の思考力・判断力・表現力等に課題が見られる。

そこで、それらの力を育み、算数・数学の学力向上の方策を以下に4点示す。

1. 「目的を持って見通しを立てたり、結果を振り返ったりする」指導の充実

そのため、下記の学習過程の充実により一層取り組んでいかなければならない。

【授業づくりのポイントを5つの段階にわけた学習過程】

- | | |
|----------|----------------------|
| ①出 合 う | 課題を積極的に受け止め、意欲的に向き合う |
| ②結び付ける | 既存・既習の知識・技能と結びつける |
| ③向 き 合 う | 自分の力を頼りに一人で課題に向き合う |
| ④つ な げ る | 友だちの考えをつなぎ、考えを深める |
| ⑤振 り 返 る | 自分の学びを振り返り、自己評価を行う |

【出典】 「大阪の授業STANDARD」 平成24年5月大阪府教育センター

このうち、②結び付けるの場面において、既存・既習の知識・技能と結びつけるとともに、その知識・技能をつかって課題解決の方法と結果について見通しを立てることが大切である。また、そこで立てた見通しをもとに、結果を振り返る活動を充実させていく必要がある。

例えば、問題解決の方向を話し合う場面で、式を用いて解決する方法を取り上げるのであれば、何についての式か、何を求めればよいかを確認する中で説明を洗練していくことも考えられる。その上で、予想した事柄について説明する活動を設定することが大切である。また、予想する際には、正しい予想だけでなく、誤った予想も取り上げ、全体でそれらが正しいかどうかを説明していく活動を取り入れることが大切である。

2. 児童生徒が主体的に関わる授業づくりの充実

形式的な計算・測定の処理だけでなく、日常の事象と関連付けたり、児童生徒が主体的に関わる場面を設けたりすることが重要となる。そのためには、算数的活動・数学的活動の充実と、言語活動の充実が必要である。

③向き合うや④つなげるの場面では、解決へのプロセスをノートに記述したりする活動が必要であると考えられる。

例えば、式の指導においては、単に計算するだけでなく、具体的な場面に対応させながら、事柄や関係を式に表すことができるようにする。さらに、式を通して場面などの意味を読み取り言葉や図を用いて表したり、式で処理したり考えを進めたりすることが大切である。さらに、式を、言葉、図、表、グラフなどと関連付けて用いて自分の考えを説明したり、分かりやすく伝え合ったりできるようにすることが大切である。

3. 系統的・継続的な学びの充実

思考・判断したことを的確に表現することができるようにするために、系統的に数学的な思考力・表現力を高める指導計画を考える必要がある。校種間での内容の関連を踏まえ、授業で配慮・工夫すべきことを捉えることが重要である。

4. 授業において、説明する際の記述内容を明確にした指導

小学校・中学校に共通して、記述式の設問では、無解答率は全国・大阪府より低く、解答しようと努力した様子が見られるが、正答率が低い設問があることから、説明の内容が不十分であったと考えられる。そのため、算数・数学科においては、言葉や数、式、図、表、グラフなどを用いて、筋道を立てて説明したり論理的に考えたりして、自ら納得したり、他者を説得したりできることが大切である。その際、何を記述し、何を説明すればいいのか、その内容を明確にしながらい指導していくことが必要である。

これらの上記1～4の方策が、「主体的・対話的で深い学び」の実現につながるものと考えられる。

3. 児童生徒質問紙調査結果の分析

①基本的な生活習慣

熊取町の児童生徒の基本的な生活習慣に関する質問に対する回答結果と学力調査結果のクロス集計により、以下の点が明らかになった。

「毎日朝食を食べていますか」の質問に対して、小学校では、肯定的回答をしている児童の方が学力調査の正答率が高かった。一方、中学校では、全く食べていない生徒の正答率が高い傾向にあるなど、質問紙の回答結果と学力調査結果の間に相関関係は見られなかった。

「就寝時刻」については、小中学校とも、毎日決まった時間に寝ている児童生徒の方が正答率が高かった。「起床時刻」については、顕著な相関関係はみられなかったが、小学校において、「毎日、同じくらいの時間に全く起きていない」と回答した児童の正答率は極端に低かった。

普段のテレビやビデオ・DVDの視聴時間と正答率の関係について、小学校では、1～2時間程度視聴している児童の正答率が若干高い傾向にあった。中学校においては、視聴時間が短いほど正答率が高い傾向にあった。

一日のテレビゲームの時間及び携帯電話やスマートフォンでの通話やメール・インターネットの使用時間と正答率との関係をみると、いずれも時間が短いほど正答率が高かった。

平成29年度の熊取町の基本的な生活習慣に関する調査結果を、平成28年度の熊取町の調査結果と比較すると、小学校では「朝食を毎日食べている」「毎日、同じくらいの時刻に寝ている」「毎日、同じくらいの時刻に起きている」と回答した児童の割合は増加している。平成29年度の全国、大阪府の結果と比較しても肯定的割合は若干ではあるが高い。

一方、中学校では、平成28年度の熊取町の結果と比較すると「朝食を毎日食べている」「毎日、同じくらいの時刻に寝ている」と回答した生徒の割合は減少しており、「毎日、同じくらいに起きている」と回答した生徒の割合は増加した。平成29年度の全国・大阪府との比較では、「朝食を毎日食べている」「毎日、同じくらいの時刻に起きている」割合は、大阪府よりも高く、全国とほぼ同じであるが、「毎日、同じくらいの時刻に寝ている」割合は全国、大阪府よりも低かった。

テレビやビデオ・DVD等の視聴時間、テレビゲームの時間、携帯電話やスマートフォンでの通話やメール、インターネットをする時間について、小学校は全国とほぼ同じで、大阪府より長い傾向にある。中学校においては、すべてにおいて、熊取町は全国・大阪府よりも視聴時間、使用時間等が長かった。

携帯電話、スマートフォンの所持率は、小学校で68.7%（全国63.3%、大阪府70.9%）、中学校で89.9%（全国83.9%、大阪府89.9%）で、平成28年度の熊取町の結果と比較して、小学校で4.2%、中学校で2.7%増加した。

基本的な生活習慣の確立は、子どもが成長していく上で重要であり、特に、栄養・睡眠・運動の3つ要素は非常に大切である。本年度の調査結果から、熊取町の児童生徒、特に中学生は、携帯電話やスマートフォンの操作に時間を長い時間を費やしている傾向にあり、睡眠時間が短くなりがちである。このようなことから、基本的な生活習慣について、児童生徒が自らの生活について自覚するとともに、保護者も含めてその重要性について理解することが必要である。

②家庭生活

平成29年度の児童生徒質問紙調査の家庭生活に係る質問内容は、昨年度と大幅に変更となり、全質問8項目中7項目が新設の質問であった。

平日の放課後の過ごし方について、小学校では、「友達と遊んでいる」割合が最も高く(81.7%)、次いで「家でテレビやゲーム、インターネット等をしている」(73.7%)であった。中学校では「学校の部活動」(69.2%)、次いで「家でテレビやゲーム、インターネット等をしている」(67.1%)割合が高かった。

土曜日の午前の過ごし方については、小学校は「家族と過ごしている」と回答した割合が72.1%で最も高く、その次が「テレビやゲーム、インターネット等をしている」であった。中学校は、部活動が60.2%で最も高く、次いで「テレビやゲーム、インターネット等をしている(53.4%)」であった。しかし、土曜日の午後については、小学校では「家族と過ごしている割合」が最も高くなり、次いで「テレビやゲーム、インターネット等をしている」「友達と遊んでいる」であった。中学校は「テレビやゲーム、インターネット等をしている」「家族と過ごしている」「友達と遊んでいる」の順であった。土曜日の過ごし方をみても、現在の児童生徒の一日の過ごし方についての特長がよく現れており、平日の放課後や土曜日においても、テレビやインターネット等に費やす時間が長くなっているといえる。

このような状況の中で、携帯電話やスマートフォンについての家の人との約束について、「守っている」と回答した割合は、小学校では、全国・大阪府よりも高く53.4%であった。中学校も全国・大阪府よりも高く57.4%であった。一方、「約束はない」と回答した割合は、小学校で9.4%、中学校では21.2%にのぼる。今後も、携帯電話やスマートフォンの使用の仕方等についてのルールづくりが課題であると考えられる。保護者等への啓発を行うとともに児童生徒自身に考えさせる機会が必要である。

テレビやゲームをする時間について、小学校で45%、中学校で70.6%の児童生徒が「ルールを決めていない」と回答している。全国・大阪府と比較して、家の人とルール作りをしている割合は低い結果であり、携帯電話、スマートフォンと同様、テレビやゲームについてもルール作りが必要である。

家の人との対話や学校行事等への参加については、小学校では、「学校での出来事につい

て話をする」割合は全国・大阪府よりも高く、「将来のことについて話をする」割合は、全国よりも低く、大阪府とほぼ同じという結果であった。授業参観や運動会などの学校行事への参加については、「よく来る」が89%で、全国・大阪府よりも7.5ポイント高く、「ときどき来る」を合わせると99.3%となり、全国・大阪府よりも約4ポイント高い。中学校では、学校での出来事について話をする割合は72.4%で、全国よりもやや低く、大阪府よりも高い結果であったが、「将来のことについて話をする」割合は61.7%で、全国、大阪府よりも高かった。「授業参観や運動会などの学校行事への参加」については、肯定的な回答の割合は79.5%で、全国・大阪府よりも低かった。

子どものよりよい成長のためには、家庭生活が重要であり、学校と家庭が協力することが不可欠である。熊取町の小中学生は、家庭でコミュニケーションをとったり、学校の行事等への参加の割合は、トータルで見ると高い傾向にある。昨年度の調査でも、同様の傾向が見られており、今後もこのような傾向が続くよう地域ぐるみで子育てが出来る環境作りを進めていくことが必要である。

③学習時間等

平日の学習塾や家庭教師を含んだ家庭での学習状況をみると、小学校においては、1日「1～2時間学習している」割合が最も高く、次いで「30分～1時間」であった。一方、中学校においては、「2～3時間」が最も多く、次いで「1～2時間」であった。平成28年度は「1時間よりも少ない」と回答した割合が最も高かったことから、中学校での学習時間は昨年度よりも大幅に長くなったといえる。中学校の全国平均、大阪府平均は「1～2時間」が最も多い。また、「全く平日に勉強をしない」割合は、小学生は5.7%、中学生は9.2%で、小学生は昨年度よりも減少し、中学生はやや増加している。中学生の「全く勉強しない」割合は、全国の約2倍であり、課題であると言える。

休日の学習時間については、小学生は全国・大阪府と比較して短い傾向にある。全く学習しない割合も16%で、全国よりも6.3ポイント高い。一方、中学生は長時間学習している生徒の割合が高く、全体的に長い傾向にある。しかし、全く学習しない割合は20.9%で全国の約2倍と高い状況である。

学習塾（家庭教師を含む）に通っている割合は、小中学校それぞれ44.8%、74.1%で、小学校は全国・大阪府よりも若干低く、中学校は、全国・大阪府よりも高い。（全国比+12.7ポイント、大阪府比+3.9ポイント）

学校以外での平日の読書時間については、昨年度は、小中学生とも、「2時間以上している」と回答した割合は全国・大阪府平均よりも高かったが、平成29年度は、小中学校ともに全国よりも若干低く大阪府よりも高い結果となった。全く読書をしない割合は、小学校で27.4%、中学校で48.5%にのぼり、読書離れが懸念される。これは、昨今、インターネットが普及し、コンピュータや携帯電話、スマートフォンで手軽に検索できることが影響

していると推察される。

また、昼休みや放課後、学校が休みの日に本を読んだり借りたりするために、学校図書館や地域の図書館を活用している状況については、小中学生ともに、全国・大阪府よりも利用頻度が高い傾向にある。「ほとんど、全く利用しない」割合は小学校で23.5%で全国よりも8.8ポイント低く、中学校では56%で、全国より2ポイント低く、大阪府よりも10.1ポイント低い。

家庭での自学自習の状況を見ると、計画を立てて学習している割合は、時々している児童生徒を含めると、小中学生とも全国よりも低く、大阪府よりも高い。常に計画を立てて学習している割合は、中学校においては、全国よりも高い。

宿題の実施状況については、小学生は、実施している割合は全国・大阪府平均よりも高いが、中学生は全国・大阪府平均よりも低い。これは、昨年度と同様の傾向である。また、中学生については、全くしていない割合も全国・大阪府よりも高く課題である。

家庭での予習・復習については、小中学生とも予習よりも復習をしている割合の方が高い。学力調査の結果と、予習・復習の関連性をみると、小学校においては、予習・復習ともに学力調査の結果と正の相関関係が見られた。しかし中学校においては、予習については相関関係は見られなかったが、復習の有無と学力調査の結果には「国語A、数学A」の基礎問題について、正の相関関係が見られた。

以上の結果から、熊取町の児童生徒の家庭学習の状況は、学習時間の長さにおいても、計画的な学習の実施においても、全国や大阪府と比較してやや不足している傾向にあることが明らかとなった。今後は、家庭学習習慣をどのように定着させるかについて検討し、取り組むことが必要である。

④学校生活等

学校生活に関する質問のうち、「学校が楽しいか」「学校で、友達と会うのは楽しいか」「好きな授業があるか」については、児童生徒の学校生活の満足度や学校が今後取り組むべき課題を考える上で、大切な項目であるといえる。

「学校に行くのは楽しいと思いますか」の質問に対して、小学校では61%の児童が「そう思う」と回答しており、全国よりも5.6ポイント、大阪府よりも7.4ポイント高い。「どちらかといえばそう思う」を加えると、90.0%の児童が肯定的な回答をしている(全国86.3%、大阪府85.2%)。中学校では、49.6%の生徒が「そう思う」と回答しており、全国よりも2.3ポイント、大阪府よりも5.4ポイント高い。「どちらかといえばそう思う」を加えると、81.4%が肯定的な回答をしている(全国80.9%、大阪府78.3%)。小中学校とも全国・大阪府よりも学校に行くのが楽しいと思っている割合は高い。

「学校で、友達と会うのは楽しいか」の質問に対して、小学校では87.2%の児童が「そう思う」と回答しており、全国よりも3.7ポイント、大阪府よりも4.4ポイント高い。「ど

ちらかといえそう思う」を加えると、97.2%の児童が肯定的な回答をしている(全国 96.4%、大阪府 96.0%)。中学校では、76.9%の生徒が「そう思う」と回答しており、全国よりも 1.4 ポイント、大阪府よりも 3.5 ポイント高い。「どちらかといえそう思う」を加えると、95.3%が肯定的な回答をしている(全国 94.6%、大阪府 83.7%)。小中学校とも全国・大阪府よりも学校で、友達と会うのが楽しい思っている割合は高い。

「学校で、好きな授業がありますか」の質問に対して、「そう思う」と回答している児童の割合は 78.5%で、全国よりも 0.1 ポイント、大阪府よりも 1.7 ポイント高い。しかし、「どちらかといえそう思う」を加えた肯定的な回答は、熊取町が 91.7%に対して、全国は 93%、大阪府は 91.6%で、全国よりやや低い結果であった。中学校においては、「そう思う」と回答した生徒の割合は 47.5%で、全国よりも 6 ポイント低く、大阪府と同じであった。「どちらかといえそう思う」を加えた肯定的な回答は熊取町の 71.5%に対して、全国 79.2%、大阪府 72.9%であり、熊取町は全国より 7.7 ポイント低かった。

以上のことから、学校が楽しく、友達と会うのも楽しみであるという児童生徒の割合が高いことは大切であり、今後も、このような児童生徒が増えるように努力しなければならない。しかし、一方で、好きな授業があると回答した割合は約 7 割であり、全国・大阪府よりも低い。今まで以上に、分かる授業の創造や、楽しい授業作りを行い、児童生徒が興味関心を高め、主体的に取り組めるように努力しなければならない。

また、肯定的回答の割合の高かった 2 項目について、学校が「どちらかといえ楽しくない」「楽しくない」と回答している児童生徒が小学校で約 1 割、中学校で約 2 割ある。また、「友達と会うのがどちらかといえ楽しくない」「楽しくない」と回答している児童生徒が小学校で約 3%弱、中学校で約 5%弱ある。これらの児童生徒への対応が課題である。

学級での様子等に関する質問は「学級会などの話し合い活動で、自分とは異なる意見や少数意見のよさを生かしたり、折り合いをつけたりして話し合い、意見をまとめていますか」「学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがありますか」の 2 項目であった。

1 つ目の質問については、小学校における肯定的回答は 53.0%で、全国・大阪府の割合よりも高かった。中学校においては、肯定的回答は 35.1%で全国よりも低く、大阪府よりも高い結果であった。2 つ目の質問については、小学校における肯定的回答は 86.3%で、全国よりもやや低いものの、8 割 5 分以上の児童が、みんなで協力してやり遂げてうれしかったと回答している。また、中学校においても、82.6%の生徒が肯定的回答をしており、全国よりも低く、小学校と比較してもやや低い、高い割合を示している。

集団生活において、他者を尊重し、少数、多数にかかわらず、他者の意見を尊重する姿勢は、非常に大切である。そして、みんなで協力し合い、何かを成し遂げたときの喜びを味わうことは、今後、さまざまなことに取り組み、挑戦していく上でも大切な経験となる。このような点から、100%の児童生徒が肯定的な回答になることをめざして、各学校、各クラスで学級作りに取り組むことが必要である。

先生の対応等に関する質問については、全体的に、全国・大阪府と比較して、肯定的回答が低い傾向にあった。

「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」の質問については、小学校での肯定的回答は84.9%で、比較的高い数値を示している。全国・大阪府と比較しても大きな差はなかった。しかし、中学校においては、肯定的回答の割合は63.0%と低く、全国よりも17.4ポイント、大阪府よりも12.8ポイント低い。また、「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてください。」については、小学校では、肯定的回答は83.5%で全国よりもやや低く、大阪府とほぼ同じであり、高い数値を示している。しかし、中学校においては、肯定的回答は65.2%で全国よりも10.3ポイント低く、大阪府よりも6.1ポイント低い。このようなことから、中学生の教職員に対する意識について、各校の結果を分析し、その原因や背景をしっかりと明らかにし、今後取り組んでいくことが必要である。

本年度の質問紙調査において、中学校における部活動についての質問が新設された。それによると、部活動に参加していない割合は、21.2%で、全国よりも9.0ポイント高く、大阪府よりも3.0ポイント高いという結果であった。

⑤学習状況

「友達の前で自分の考えや意見を発表することが得意だ」と感じている児童生徒の割合は、小中学校とも全国・大阪府平均よりもやや低かった。熊取町の平成28年度の結果と比較すると、小学校においては、肯定的な回答の割合は1.8ポイント減少し、中学校では、7.4ポイントと大幅に減少した。「友達と話し合うとき、話や意見を最後まで聞くことができるか」の質問に対して、小学校では、肯定的回答の割合は96.1%で全国・大阪府平均よりも高い。一方、中学校においては、肯定的回答の割合は93.2%で全国・大阪府平均よりもやや低かった。しかし、平成28年度の熊取町の結果と比較すると、小学校で1.9ポイント、中学校で2.1ポイント増加した。新学習指導要領では、全教科において言語活動の充実を求めている。平成28年度は「友達の前で自分の考えや意見を発表することが得意だ」と回答した児童生徒の割合は、全国・大阪府よりも高く、各小中学校の授業改善の取り組みの成果であると分析した。しかしながら、本年度については、特に中学校で昨年度より肯定的回答の割合は大きく減少しており、今後の課題であるといえる。

一方、話し合いの時に話や意見を最後まで聞くことができる児童生徒の割合は、昨年度よりも増加しており、これは、言語活動を行う上で大切なことである。今後も、継続した取り組みを進めたい。

「友達と話し合うとき、友達の考えを受け止めて、自分の考えを持つことができますか」の質問に対して、肯定的な回答の割合は小学校では91.4%であり、全国よりも5.9ポイント、大阪府よりも6.9ポイント高い。中学校においても肯定的な回答の割合は88.0%であ

り、全国とほぼ同じで、大阪府よりもやや高かった。これは、話を最後まで聞く姿勢ができていたため、友達の考えを受け止めて自分の考えを持つことができているのではないかと考えられる。

「家で学校の宿題をしますか」の質問に対して、小学校における肯定的な回答の割合は、98.4%で、全国・大阪府よりも高かった。一方、中学校においては肯定的な回答の割合は、72.9%で、全国・大阪府よりも低い。

「家で学校の授業の予習をしていますか」の質問に対して、小学校における肯定的な回答は41.1%で、全国・大阪府よりも高かった。中学校においては24.9%で全国よりも低く、大阪府よりも高かった。

「家で学校の授業の復習をしていますか」の質問に対しては、小学校における肯定的な回答は46.2%で、全国より低く、大阪府よりも高い。中学校では35.8%で、全国・大阪府よりも低かった。

調査結果から、予習をしている児童生徒の割合は、復習をしている児童生徒の割合よりも低い傾向にあることが明らかになった。また、中学校においては、熊取町の中学生は、「宿題」、「復習」をしている生徒の割合が全国と比較して、それぞれ、16.6ポイント、14.7ポイント低く、大きな課題である。ただ、クロス集計結果によると、上記3つの質問と学力調査結果との間に、顕著な相関関係はみられなかった。しかしながら、学習内容の確実な定着のためには、宿題、予習、復習等の家庭学習の習慣を身につけることは非常に大切である。今後も、保護者と連携しながら取り組みをすすめてたい。

⑥規範意識

「学校のきまり（〔中〕規則）は守っていますか」の質問に対し、小学校における肯定的な回答の割合は94.9%で、全国・大阪府よりも高かった。また、平成28年度の熊取町の結果よりも4.1ポイント高い。一方、中学校においては、肯定的な回答の割合は87.3%であり、全国よりも7.9ポイント、大阪府よりも5.9ポイント低い。平成28年度の熊取町の結果と比較しても4.0ポイント低下している。

「友達との約束を守っているか」については、小学校では肯定的な回答の割合は96.8%で、全国・大阪府とほぼ同じである。しかし、平成28年度の熊取町の結果よりも1.1ポイント低下した。中学校では肯定的な回答の割合は96.7%で全国よりもやや低く、大阪府よりもやや高かった。

「人が困っているときは進んで助けますか」の質問に対しては、小学校では肯定的な回答の割合は82.6%、中学校は80.3%で、いずれも全国・大阪府よりも低かった。小中学校とも、平成28年度の熊取町の結果よりも低い。

「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」については、肯定的な回答の割合は、小学校で95.2%、中学校では91.8%であった。平成28年度の熊取町の結果

と比較して、小学校では1.6ポイント減少し、中が校では0.5ポイント増加した。小学校で4.8%、中学校で8.2%の児童生徒が否定的な回答をしており、これらの児童生徒への対応が課題である。学校の日々の取り組みや、家庭、地域との連携を図ることにより、児童生徒の理解の促進や意識改革に取り組むことが必要である。

「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」の質問については、肯定的回答の割合は、小学校で93.6%で、全国・大阪府よりも高かった。一方、中学校においては89.2%で全国・大阪府よりも低い。平成28年度の熊取町の結果と比較して小中学校とも若干低下している。規範意識に関する質問に対しては、8～9割の児童生徒が肯定的な回答をしている。しかしながら、小学校においては、熊取町の平成28年度の結果よりも低下している項目が5項目中4項目あり、中学校では5項目中3項目であった。また、中学校においては、低下の割合が高い。学校生活や社会生活を営む上で、規範意識を身につけることは必要不可欠である。社会全体の規範意識の低下が叫ばれる中、学校のみならず、家庭、地域の大人が現状をしっかりと認識し、率先して規範意識を守ることの大切さを身をもって示すことが必要である。

⑦自尊感情

自尊感情に関する質問は「(4) ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがありますか」「(5) 難しいことでも失敗を恐れなくて挑戦していますか」「(6)自分には、よいところがあると思いますか」の3項目である。

小学校においては、全国・大阪府と比較して、(4)については肯定的回答が94.5%で、ほぼ同じであり、(5)(6)はそれぞれ肯定的回答は81.3%、79.9%で、いずれも全国・大阪府よりも高くなっている。中学校では、肯定的回答の割合が(4)が92.2%、(5)が69.5%、(6)が63.5%であり、全国・大阪府と比較して、すべて低い結果であった。平成28年度の熊取町の結果と比較すると、小学校においては、(5)(6)で、それぞれ8.3ポイント、6.9ポイントと大きく増加した。一方、中学校においては、(4)(6)において低い結果となった。

これらのことから、中学校において、全国・大阪府よりも自尊感情が低い傾向にあるといえる。自尊感情は幼少期からの様々な体験や、成就感、達成感等を味わうことにより育まれるものである。学校においては、この結果を踏まえて、児童生徒一人ひとりを大切にしながら日常の教育活動を行うとともに、保護者、地域に対してもその必要性を啓発することが必要である。

⑧将来に対する意識

将来に対する意識に関する質問は、4項目中3項目が新設であった。質問内容は「(10)将来の夢や目標を持っていますか」「(11)授業で学んだことをほかの学習や普段の生活にいか

していますか」「([小]47)([中]49)外国の人と友達になったり、外国のことについて、もっと知ったりしてみたいと思いますか」「([小]48)([中]50)将来、外国へ留学したり、国際的な仕事に就いたりしてみたいと思いますか」の4項目である。

小学校においては(10)(11)の両方において、全国・大阪府よりも肯定的回答の割合は高く、それぞれ87.5%、83.6%であった。一方、中学校においては(10)については、全国より低く、大阪府より高い結果で肯定的回答の割合は68.9%であった。(11)については、全国・大阪府よりも低く、肯定的回答の割合は62.1%であった。

小学校では(47)の質問については、肯定的回答が58.5%で、全国より低く、大阪府よりも高かった。(48)については肯定的回答が30.8%で全国・大阪府よりも低かった。中学校においては、(49)については肯定的回答の割合が64.5%、(50)は41.0%で、いずれも全国・大阪府よりも高かった。特に(50)については、全国よりも8.1ポイント、大阪府よりも3.3ポイント高く、将来、外国へ留学したり、国際的な仕事に就いたりしてみたいと思っている生徒が多い傾向にあった。これは、9年間をとおした英語教育の充実、ALTの配置による成果であると考えられる。

⑨社会生活、地域との関わり・社会に対する興味・関心

「今、住んでいる地域の行事に参加していますか」「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか」「テレビやニュース番組のインターネットのニュースを見ますか(携帯電話やスマートフォンを使ってインターネットのニュースを見る場合も含む)」の3つの質問に対して、肯定的な回答は、平成28年度と熊取町の結果と比較して、小中学校とも大きく減少している。「地域社会などで、ボランティア活動に参加したことがありますか」については、平成28年度の熊取町の結果と比較して、小学校においては大きく減少し、中学校においては増加した。

「([小]42)([中]43)地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか」の質問に対して、小学校においては肯定的回答の割合が44.1%で、全国よりも1.8ポイント、大阪府よりも6.9ポイント高い。「([小]44)([中]45)地域の大人(学校や塾、習い事の先生を除く)に勉強やスポーツを教えてもらったり、一緒に遊んだりすることがありますか」については、小学校では41.6%が肯定的回答で、全国よりも0.5ポイント、大阪府よりも3.2ポイント高かった。一方、中学校では(43)については肯定的回答の割合が32.3%、(45)が23.1%でほぼ全国と同じであった。

核家族化が進み、地域での人と人とのつながりが希薄になっていると言われていの中で、「地域の子どもを地域で育てる」といった意識を持ち、子どもの成長を見守る体制作りが必要である。熊取町においては、祭りを中心として、子ども会活動や自治会活動等、他の市町村よりも地域のつながりは強いと言われていながらも、今後も地域ぐるみで子どもを育てるという意識の啓発が求められる。